



発行

令和元年 12月 7日

相模原市文化財調査・普及員
広報グループ

文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク

両手のひらと日本
建築伝統の組物を
イメージしたもの

～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

市指定天然記念物 城山のウラジロガシ — 檜の木は残った —

緑区中沢にあるウラジロガシは、相模川左岸の関東山地裾部の南に面した丘陵斜面に生育し、樹高は約 20m、幹回り 8.4m、枝張りは 360㎡に達し、樹齡(推定)は約 600 年ともいわれています。

ウラジロガシ(ブナ科コナラ属)は葉は互生、葉表は深緑色で、名前のお通り葉裏が青白いのが特徴です。葉先側 3分の2ほどに鋸歯きょしがあり、葉先が尾状に長く尖ってねじれ、葉縁が波打っていることで、葉の形状からおおよそ判別することができます。宮城・

新潟県以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑樹で、市域では相模川の溪谷の斜面地などに生育しています。江戸時代以降、木に対する需要の変化に伴い、薪炭採取のためのコナラやクヌギを中心とする落葉広葉樹や、建築資材確保のためのスギやヒノキなどが植林され、里山の植生の多くは置き換わります。そのような中、原植生のシイ・カシ林の構成種であるウラジロガシは、相模原市の植生や歴史を知る上で重要で、特に城山のウラジロガシは樹高、幹回り、樹齡とも市指定天然記念物として貴重な巨樹といえます。

平成 14 年(2002)、さがみ縦貫道路(圏央道)事業が進む中で、事業地内に大きな木が存在することが確認されました。周囲を竹やぶや雑木林に隠されていたため人目につかず、環境省による巨樹・巨木林調査や圏央道の建設に伴う環境影響評価書からも漏れていたのです。

その後、道路工事に伴いこの巨木が伐採の危機にあることが報道されたことで、多くの方々から救済を求める声が上がリ、巨樹の保護活動に取り組む「全国巨樹・巨木林の会」と、保全活動をしている地元の方々などで調査を行いました。調査では、地上から高さ 1.3 mの幹回りが 8.4 mほどで、当時日本一とされていた千葉県君津市のものよりも 1 m以上太いことが判明し、「全国巨樹・巨木林の会」によって「日本一」の巨木と認定されました。国交省相武国道事務所はこのウラジロガシを全国的にも貴重な巨木として残すことを決め、当初予定していたルートを変更することで保存を決定したそうです。

天然記念物にとって、近年の気候の変化が及ぼす影響は大きなものがあります。ウラジロガシも昨年の台風では老朽化した大きな枝が何本も折れるなど大きなダメージを受けました。さらに、一部幹の空洞化が見られるなど、心配事はたくさんありますが、是非一度、ウラジロガシに会いに行ってみてください。

橋本駅より三井経由三ヶ木行きのバスに乗り、中沢で下車し、山側の三嶋神社方面に進み、圏央道に架かる高架を渡ると右手斜面の上にその樹姿を見ることができます(柵があり、木本体に直接触れることはできません)。

(津久井班 田中)

目 次	
・市指定天然記念物 城山のウラジロガシ — 檜の木は残った — ……………	P 1
・明治時代にあった道だけを歩いて 「橋本駅」から「相原駅」に行く P 2	
・番田の諏訪神社と神代神楽の由来 P 3	
・念仏行者徳本上人の生い立ちと 入寂の一行院訪問 ……………	P 4

明治時代にあった道だけを歩いて「橋本駅」から「相原駅」に行く

北部班では、明治時代にすでにあった道だけをたどり、文化財等を巡りながら JR 橋本駅から相原駅まで歩いてみる研修を行いました（図1）。①の橋本駅北口前は駅ができる前は道がなく桑畑や麦畑ばかりでしたが、地主が土地を寄付して、川越方面より⑥から③を通して大山に続く「埼玉往還(大山道)」につながるように、駅から斜め左上に続く道がつけられました。②のY字路を左に行くと、駅をつくる時県知事などと柿の木の下で相談した「橋本駅ゆかりの碑」があります。また、③の踏切には「大山街道踏切」という名が残っています。④の「神明大神宮」参道入り口は、反対方向に行くと「旭小学校」につながります。⑤の「香福寺」には市の有形民俗文化財の「徳本念仏塔」があり、ここが「橋本宿」の「下宿」に当たります。「瑞光寺」のあたりを「中宿」といい、この前を通して七国峠や御殿峠を越える「鎌

倉道」がありました。⑥の「両国橋」（両国とは相模国と武蔵国）あたりが「上宿」と呼ばれ、道の両側に幕府の高札場こうさつばがありました。八王子方面から来た「大山参り」の旅人は、「境川」の「精進場」しょうじんばで体を清めたと伝えられています。現在ここは「八王子バイパス」の高架下になっています。この地点の右の方に、現在の「町田街道」の原型になる道路が見えます。当時から広い道路だったのが地図上でも確認できます。この道路を左側に進むと⑦の地点で家にぶつかりますが、ここが江戸時代からある「青木家」です。建物は町田市指定有形文化財、屋敷地は東京都指定史跡になっており、広い庭と茅葺きの主屋、土蔵などが残されています。ここを道なりに進むと⑧のところまで左上に進む道があり、この道は現在もそのまま残って「相原駅」につながっています。（北部班 笹川）



図1 「上溝」 明治39年測図42年 S=1/20000 『今昔マップ on the web』より作製

番田の諏訪神社と神代神楽の由来

番田の諏訪神社は、鎌倉時代創建の伝承を持ちますが、江戸時代に編纂された『新編相模国風土記稿』には、南北朝時代にあたる貞治6年（1367）、同地にあった安楽坊（移転した現安楽寺）持ちで、相模国東郡渋谷庄上村下村の総鎮守として、信州の諏訪大明神から勧請したと記されています。祭神は建御名方神^{たけみなかたのかみ}で、元は風雨を司り農漁業の守護神として信仰されていました。一方、神功皇后や坂上田村麻呂が征戦に戦勝祈願したとされ、武家の守護神としても尊ばれています。

室町時代から戦国時代の記録は少なく不詳ですが、戦国時代末期にあたる文禄3年（1594）、諏訪神社は小山家の所有地（番田）に移ったとされます。元文3年（1738）には、番田に神代神楽を伝えた亀山斎宮が没したとの記録がある事から、既にこの頃から諏訪神社の例大祭に演舞が行われていたようです。嘉永元年（1848）には、烏山5代藩主大久保忠成直筆の諏訪大明神の幟が寄贈されています。やがて大正2年（1913）神社合祀令により亀ヶ池八幡社に合祀されましたが、同7年（1918）再び番田に勧請され、同13年（1924）の相模線の開通に伴って、本殿を東向きに遷祀しました。その後、天災や戦災を経て、昭和43年（1968）、現在の社殿が新築され、現在に至っています（写真1）。

（年間祭事・行事）

1月1日 元旦祭	3月27日 春例大祭
4月3日 雹祭	8月26・27日 秋例大祭
9月1日 風祭	11月15日 七五三祭

番田の神代神楽は、秋例大祭に行われていますが、亀山家が代々踏襲し、神楽師の元締めとして続けられてきました。市指定無形民俗文化財であり、亀ヶ池八幡宮の9月例祭や田名八幡宮大祭にも奉納していました（写真2）。亀山家にはいわゆる「神道裁許状」があり、最も古いものは天明8年（1788）発行の「武州神主鈴木丹後申渡一件」で、神主としての業務が記されています。その内容には「年中御神楽湯立巫女神託等、是又可為勤仕候事」との記載があり、当時から「御神楽」

がその職掌に含まれていたことがわかります。

明治9年（1876）、亀山家当主が勘蔵の時、国家神道として神官・僧侶を登録・管理するための機関である神道事務局から、亀山家が演じる神楽演目に対して新築試験済の証書が出されています。いわば国家からその正当性を認可されたものであり、天之浮橋・黄津醜女・墨江大神・剣玉生神・天磐扉開・遂神蓑笠・八雲神詠・稲葉素兎・天之返矢・幽顕分界・三穂崎魚釣・天孫降臨・笠沙桜狩・山海幸易・妖賊剪滅・三輪神杉・狭穂討伐・熊曾征伐・東夷征伐・酒折連歌・兄弟深湯・億兆豊樂がその演目であると伝えられています。

この他、諏訪神社には天保年間（1831～1845）奉納の「汲置型天然石手水桶」、明治14年（1891）建立の右柱に「國寧家辰」、左柱に「穀實禍讓」を刻した明神石鳥居があります。また、神社の来歴と小山家が所有の資料を記した「番田諏訪神社碑文」（大正8年（1919））の石碑も建てられており、神社の歩んだ歴史を今に伝えています。（西部班 岩竹）



写真1 諏訪神社



写真2 番田神代神楽

念仏行者徳本上人の生い立ちと入寂の一行院訪問

現在、市内には文化財登録されている徳本念仏塔（名号塔・碑）が旧市域に 14、旧津久井郡に 10、計 24 基あります。

近くでは近隣の大和市深見の仏導寺を始め、広く県央から平塚市（数が多い）、遠くは川崎市、横須賀市等、県内各地に見られます。相模、武蔵だけでなく、広域では、紀伊、近江、信濃、越中、伊勢、三河、常陸、下総等にも存在し、中でも長野県内には 487 基もの名号塔が確認されています（徳本上人研究会便り第 1 号より）。

徳本上人（宝暦 8 年（1758）～文政元年（1818））の生い立ちは、「日本仏教大辞典」、「仏教史辞典」によれば、「江戸後期の浄土宗捨世派の僧で、苦修練行の念仏聖で、木食上人としても知られ、名蓮社号誉称阿と号す。宝暦 8 年 6 月 22 日、紀州日高郡志賀村久志の田伏三太夫の子として生まれ、4 歳の時に念仏を唱え、9 歳の時に出家しようとして許されず、16 歳の時に勤行式を定めて念仏をした。天明 4 年、26 歳で母の許しを得て、財部村の往生寺大円について出家得度する。天明 5 年に千津川、寛政 3 年に萩原、塩津谷山、須ヶ谷山崎の各草庵で苦修念仏をした。上人は幼児から文字を習わず、阿弥陀経の句読を習っただけで、浄土宗の祖伝、語灯録を独学し、宗要の奥義を極めたそうである。寛政 9 年に河内、摂津を行脚、享和 3 年に京都、翌年に小石川伝通院の智巖について宗戒両脈を受け、文化元年に日光山に詣でて摂津勝尾寺に戻り、文化 3 年は越前に、同 8 年に紀伊、同 11 年に増上寺典海の招きで江戸に出て、小石川の一行院を再興し、文政元年 11 月 6 日、高声念仏して入寂した。多くの弟子と広く伝道に歩き、各地に特殊な名号を残した」とあります。



写真 3 徳本上人の墓

東国へは文化 11 年（1814）から 14 年（1817）にかけて各地を熱心に布教し、村々の農民達から熱狂的な信仰を得たとされます。相模原市域の念仏塔もこの時期から徳本上人の入寂後にかけて、弟子達や地方の農民達が建立したものです。また、同時に各地で念仏講が盛んになっています。

11 月に小石川の一行院（最寄駅：都営三田線「千石駅」）にある徳本上人の墓（写真 3）を訪れ、お参りをしましたが、高さ 7 m 半、総重量 18 t の立派なお墓です。墓石は御影石で、徳本上人の篤信者である大阪の豪商（油問屋）吉田喜平次の寄進で神戸の御影から江戸まで海上運搬されたそうです。

住職の八木千暁師からは、一昨年の上人 200 回忌を機に全国の徳本研究者を集めて「念仏行者徳本上人研究会」を立ち上げたこと、一行院で第 1 回、第 2 回は縁の和歌山宝善寺で開催し、「徳本行者傳」、「徳本行者全集」をもとに徳本の遺徳を後世に伝えるべく研究会を進めていきたいことや、徳本上人と将軍家、大奥や大名方の奥向きの女性達との係わり等、貴重なお話を伺い参考になりました。

今回は徳本上人の生い立ちと一行院徳本上人の墓の紹介でしたが、今後は徳本上人の生き様や県内での巡錫や念仏塔の存在状況等を調べていきたいと思えます。

（東部班 佐藤）